

「地域のよろず屋」として

自治医大を卒業し、早八年が過ぎようとしています。研修期間を除くと、実際にへき地医療に携わったのは五年足らずですが、これまでに三カ所の地域に赴きました。

いずれも病床が三十床弱で、自分も含めて医師が二、三人の小規模な施設でした。しかし、各地域内で唯一の医療機関であり、常備消防施設も未整備のため(救急車がない)、業務内容は院内外を問わず、非常に多様でした。

気負い過ぎて

今振り返ってみると、楽しかった事、つらかった事、いろいろな事があったなと思ひ出され

ます。どちらかといえば、つらかった事が多かったでしょう。

各地域に派遣されるたびに、

地域内の唯一の医療機関という事もあり、「自分が地域住民の

しらあ 白尾 英仁 ひでひと 22期生・1999年卒

健康を守っていくんだ! 自分が最後の砦(とりで)なんだ!」という気持ちで医療に携わっていたように思います。

しかし、理想と現実のギャップや自分の未熟さを痛感するたびに、また幾度となく壁にぶつかり、たたきのめされるたびに落ち込み、しまいには「自分がいる事が、かえって住民の不利益になっていないんじゃないか?」と自問自答してしまう事もしばしばでした。

住民と助け合い

まじめに辞めようか悩んでいた時期に、ある困った事例が発生しました。なかなか解決策を見いだせないまま、時間だけが過ぎていったのです。

が、ある会議の場で悩みを相談したところ、みんながこぞってアイデアを持ち寄り、あれよ

という間に解決してしまいました。この事は自分にとって非常にシヨッキングな出来事でした。

西米良村の言葉に「てごりの精神」という言葉があります。相互扶助、お互いに助け合つという意味です。今まで心のどこかに「患者さん=弱いもの」という考えがあり、自分が支えていかなければ駄目なんだと勝手に考えていました。

しかし、「そつではないんだ、自分も弱い人間であり、自分も患者さんに支えられていたんだ」。そんな、当たり前ですが、自分に欠けていた大事な事に気付かされました。

「病気を診ずして患者を診よ」。宮崎出身の高木兼寛先生の言葉です。患者さんだけでなく、その家族や生活、さらには地域全体を支えているように、そして自分も支えられながら、今日も「地域のよろず屋」として頑張っていきたいと思ひます。

(次回予定は京都府)



住診途中で見られる、村内の初秋の一風景。村内在住の写真家、小河孝浩氏が撮影した。季節ごといろいろな花が、心を和ませてくれる。(©小河孝浩)

国保西米良診療所

【私の勤務地】 西米良村は、宮崎市から車で約1時間半ほど離れた山間地にある約1300人の村。「生涯現役・元気村」を目指し、ワーキングホリデー制度などユニークな村おこし事業を展開中。2006年7月に医療福祉総合施設として全面改築された。